

SYLLABUS

シ ラ バ ス

令和8年度後期

理学療法士科 1年次

医療法人社団 慈恵会

神戸総合医療専門学校

理学療法士科 教育課程（令和8年度後期）

1年次

科目名	単位数	時間数	学年	時期	科目名	単位数	時間数	学年	時期
倫理学	2	30	1	前期	理学療法評価学Ⅰ	1	30	1	後期
物理学	1	15	1	前期	理学療法評価学Ⅱ	1	30	1	後期
統計学	1	15	1	前期	理学療法評価学Ⅲ	1	30	1	後期
生物学	2	30	1	前期	理学療法評価学Ⅳ	1	30	2	前期
医学英語	2	30	1	前期	理学療法評価学Ⅴ	1	30	2	前期
保健体育Ⅰ	1	30	1	前期	理学療法評価学Ⅵ	1	30	2	前期
保健体育Ⅱ	1	30	1	後期	運動療法学Ⅰ	1	30	2	前期
情報処理演習	1	15	1	前期	運動療法学Ⅱ	1	30	2	前期
コミュニケーション論	2	30	1	後期	物理療法学Ⅰ	1	30	2	前期
キャリア教育Ⅰ	2	30	1	前期	物理療法学Ⅱ	1	30	2	後期
キャリア教育Ⅱ	1	15	3	前期	日常生活活動学Ⅰ	1	30	2	前期
解剖学Ⅰ	2	60	1	前期	日常生活活動学Ⅱ	1	30	2	後期
解剖学Ⅱ	1	30	1	後期	装具学	1	30	2	前期
解剖学演習Ⅰ	1	15	1	前期	義肢学	1	30	2	後期
解剖学演習Ⅱ	1	30	1	前期	運動器系理学療法学Ⅰ	1	30	2	前期
解剖学演習Ⅲ	1	30	1	後期	運動器系理学療法学Ⅱ	1	30	2	後期
生理学Ⅰ	1	30	1	前期	内部障害理学療法学Ⅰ	1	30	2	前期
生理学Ⅱ	1	30	1	後期	内部障害理学療法学Ⅱ	1	30	2	前期
生理学Ⅲ	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅰ	1	30	2	前期
運動生理学演習	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅱ	1	30	2	後期
運動学Ⅰ	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅲ	1	30	2	前期
運動学Ⅱ	1	30	1	後期	中枢神経系理学療法学Ⅳ	1	15	2	後期
運動学Ⅲ	1	30	1	後期	小児理学療法学	1	30	2	後期
人間発達学	1	30	1	前期	スポーツ障害理学療法学	1	30	2	後期
内科学Ⅰ	1	30	1	後期	疼痛理学療法学	1	30	2	後期
内科学Ⅱ	1	30	2	前期	理学療法臨床技能演習	1	30	2	後期
臨床心理学	1	30	1	前期	地域理学療法学総論	1	30	2	後期
精神医学	1	30	2	後期	生活環境学	1	30	2	後期
整形外科Ⅰ	1	30	2	前期	地域理学療法学各論	1	30	3	後期
整形外科Ⅱ	1	30	2	後期	臨床実習Ⅰ	1	45	1	後期
神経内科学Ⅰ	1	30	2	前期	臨床実習Ⅱ	3	135	2	後期
神経内科学Ⅱ	1	30	2	後期	臨床実習Ⅲ	7	315	3	前期
小児科学	1	15	1	後期	臨床実習Ⅳ	7	315	3	後期
一般臨床医学Ⅰ	1	30	2	前期	臨床実習Ⅴ	2	90	3	前期
一般臨床医学Ⅱ	1	30	2	後期	理学療法特論Ⅰ	1	30	1	前期
病理学概論	1	30	1	後期	理学療法特論Ⅱ	1	30	1	後期
臨床栄養学	1	15	2	前期	理学療法特論Ⅲ	1	30	2	前期
臨床薬学	1	15	2	前期	理学療法特論Ⅳ	1	30	2	後期
公衆衛生学	1	30	1	後期	総合理学療法学演習Ⅰ	3	90	3	前期
社会福祉学	1	30	1	後期	総合理学療法学演習Ⅱ	3	90	3	後期
リハビリテーション概論	1	30	1	前期					
リハビリテーション医学	1	30	2	後期					
理学療法概論Ⅰ	1	30	1	前期					
理学療法概論Ⅱ	1	30	2	前期					
臨床運動学	1	30	2	前期					
基礎理学療法学演習Ⅰ	1	30	1	後期					
基礎理学療法学演習Ⅱ	1	30	2	後期					
理学療法研究論	1	15	3	後期					
理学療法管理学Ⅰ	1	15	1	後期					
理学療法管理学Ⅱ	1	15	2	後期					

科目名		授業形態	担当教員名	
保健体育Ⅱ		実技・講義	田中 靖人	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間（ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
「保健体育Ⅰ」に続き、講義や実技を通して生涯にわたってスポーツを継続できる知識や、技術を深められる態度や行動ができるようになることを目的とする。 パラスポーツ分野は、スポーツ指導を念頭においた実践的知識が深まるようになるようにする。				
授業の到達目標				
スポーツ活動を通して、身体のためのスポーツを実践したいという気持ちを養うことや、スポーツの楽しさを味わうことや、コミュニケーションツールとしてスポーツが活用されていることを理解する。 また、健康やスポーツに関して興味・関心を深めることができる態度を養成する。 本科目は「初級パラスポーツ指導員」資格取得に必要なため、講義を通じ資格取得に興味を持ってもらいたい。				
授業計画				
回	内容			
1	講義：健康づくりのために必要なもの			
2	実技：ニュースポーツ 1－1（フライングディスク、インディアカ、ドッジビー 等）			
3	実技：ニュースポーツ 1－2			
4	実技：ニュースポーツ 1－3			
5	実技：ニュースポーツ 1－4			
6	実技：ニュースポーツ 1－5			
7	講義：減量について考える 1			
8	実技：ニュースポーツ 2－1 または 球技 3－1（保健体育Ⅰ参照）			
9	実技：ニュースポーツ 2－2 または 球技 3－2			
10	実技：ニュースポーツ 2－3 または 球技 3－3			
11	実技：ニュースポーツ 2－4 または 球技 3－4			
12	講義：減量について考える 2			
13	講義：初級パラスポーツ指導員 資格対応講義 4（スポーツのインテグリティと指導者に求められる資質）			
14	講義：初級パラスポーツ指導員 資格対応講義 5（全国障害者スポーツ大会の概要）			
15	講義：初級パラスポーツ指導員 資格対応講義 6（障がい者スポーツに関する諸施策）			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	100%	テーマに沿ったスポーツからの知識や経験が具体化されているかを述べてください。評価基準は別途示します。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載	参考文献は定めないが必要に応じて指示することがある。			
備考				
実技受講の際には、運動にふさわしい服装で臨み、装飾品等は危険防止のため外し、貴重品類は盗難防止のためグラウンドや講堂には持ってこないこと。 けがや病気等で実技ができない場合は報告・相談すること。 天候や進度、履修者数によって実技種目や講義日を変更する場合があります。				

科目名		授業形態	担当教員名	
コミュニケーション論		講義・演習	稲垣 佑	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 2 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
対人援助職は、様々な背景をもつ他者と関わり、人間関係を適切に構築する必要がある。そのためには人の多様さを理解し、相手の背景やその場の状況に応じて適切なコミュニケーションを行うことが重要になる。本科目では、コミュニケーションに関する基本的な理論の習得を目指すとともに、授業内での体験的な活動を通して、それらの理論を実際に活用して表現できるようになることを目的とする。				
授業の到達目標				
①コミュニケーションを行うことの意義、重要性について説明できる。				
②コミュニケーションの基本的な理論について説明できる。				
③コミュニケーションの基本的な理論に基づき表現することができる。				
④対人援助職におけるコミュニケーションの特徴と具体的な技法について説明することができる。				
授業計画				
回	内容			
1	オリエンテーション、対人援助職におけるコミュニケーション			
2	聞き上手になる技術（１）			
3	聞き上手になる技術（２）			
4	伝え上手になる技術（１）			
5	伝え上手になる技術（２）			
6	共感上手になる技術（１）			
7	共感上手になる技術（２）			
8	コミュニケーションの仕組み			
9	自分自身とのコミュニケーション			
10	医療分野におけるコミュニケーション（１）			
11	医療分野におけるコミュニケーション（２）			
12	状況に即したコミュニケーション法の選択（１）			
13	状況に即したコミュニケーション法の選択（２）			
14	相談面接場面でのコミュニケーション			
15	振り返り、まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	50%	原則、授業中に実施する。評価基準は別途示す。		
小テスト	50%	コミュニケーションに関する基本的な理論の習得を評価基準とする。		
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
対人援助の現場で使える 聴く・伝える・共感する技術 便利帖		大谷佳子	翔泳社	
自由記載	講義資料を配布する。			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
こころが動く医療コミュニケーション読本		中島俊	医学書院	
対人援助の作法 誰かの力になりたいあなたに必要なコミュニケーションスキル		竹田伸也	中央法規出版	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
解剖学Ⅱ		講義	荒川 高光	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
解剖学では、人体の構造を学ぶ。理学療法士を目指すみなさんにとって解剖学は、今後の学習の基盤となる学問である。理学療法士にとって重要な骨、関節、筋、神経系はもちろん、他の器官もまんべんなく、マクロレベルからミクロレベルに至るまで全てを網羅した知識としなければ患者を全人間的に把握することは不可能である。全身の解剖学を知り、理解できるようになることを目的とする。				
授業の到達目標				
全身の人体の解剖学を理解し、説明ができることができる。解剖学が今後の理学療法学にどのようにつながっていくのかを考えながら応用することができる。				
授業計画				
回	内容			
1	神経系総論・神経組織、脊髄			
2	脳幹、小脳・間脳			
3	終脳			
4	髄膜と脳室			
5	脳の血管			
6	下行性伝導路			
7	上行性伝導路			
8	末梢神経系：脳神経（総論）			
9	末梢神経系：脳神経（各論）			
10	末梢神経系：脊髄神経（総論）			
11	脊髄神経：上半身			
12	脊髄神経：下半身			
13	末梢神経系：自律神経系			
14	視覚器			
15	聴覚器・平衡器			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%			
レポート・課題				
小テスト		適宜実施し、総合評価に加味する		
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名		出版社名
なし				
自由記載	授業資料を製本したものを使用する			
参考文献				
書名		著者・編集者名		出版社名
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
解剖学演習Ⅲ		演習・講義	堂脇 ゆかり	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
・ 基本的な神経の構造を理解する。 ・ 中枢および末梢の神経の構成とつながりを理解する。 ・ 各器官の特徴および連絡、神経伝導路を知り、動作と神経活動の関連を理解する。				
授業の到達目標				
・ 終脳の血管・局在について述べるができる。脳室の解剖・機能について説明することができる。 ・ 脳幹・間脳の機能について述べ、伝導路や脳神経と関係づけて説明できる。 ・ 反射・自律神経系の解剖・機能について説明できる。 ・ 小脳・大脳基底核の解剖・機能について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	神経系の基本構造			
2	髄膜・脳室・頭蓋骨・大脳の区分（葉・回・溝）・灰白質・白質			
3	大脳の機能局在・高次脳機能			
4	大脳辺縁系・脳血管			
5	間脳			
6	脳幹			
7	小脳1			
8	小脳2 大脳基底核1			
9	大脳基底核2			
10	脊髄・伝導路			
11	伝導路			
12	反射・自律神経			
13	脳神経1			
14	脳神経2			
15	まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%			
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
病気がみえるVol.7 脳・神経		尾上尚志 他監	MEDIC MEDIA	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
カラー図解人体の正常構造と機能Ⅷ・Ⅸ 神経系（1・2）		河田光博・稲瀬正彦	日本医事新報社	
プロメテウス解剖学アトラス 頭頸部/神経解剖		坂井建雄 他監	医学書院	
イラスト解剖学		松村譲児	中外医学社	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
生理学Ⅱ		講義	石井 禎基	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
本講義では、生体の生命現象の機序について器官系別および複数の器官系の統合された機能としての解析と、生体恒常性（ホメオスタシス）の維持に対する身体全体としての対応という観点から解説を行っていく。				
授業の到達目標				
到達目標１：ヒトの生理機能について理解する。				
到達目標２：ヒトの身体は様々な器官系の統合により調節されていることを理解する。				
到達目標３：将来医療従事者として必要とされる基礎知識を習得する。				
授業計画				
回	内容			
1	呼吸①			
2	呼吸②			
3	心臓			
4	循環①			
5	循環②			
6	血液			
7	皮膚・抗体について			
8	免疫			
9	消化・吸収①			
10	消化・吸収②			
11	腎機能			
12	内分泌①			
13	内分泌②			
14	栄養と代謝			
15	生殖			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%	60点以上を合格とする		
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
生理学テキスト 第9版		大地陸男	文光堂	
自由記載	講義資料を配布する			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
生理学Ⅲ		講義	酒巻 直美	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
理学療法において、運動に対する生理反応を理解することは極めて重要である。本講義では、解剖学ⅠⅡ、生理学ⅠⅡで学んだ内容を基礎として、運動に対する生理反応を中心に学習を行う。特に、運動における呼吸系、循環系、代謝系における生理反応、神経系、筋活動の基本的知識を習得することを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 神経系・筋活動・呼吸系・循環系・代謝系の基礎的な内容の理解を深め説明することができる。 2. 運動における呼吸系、循環系、代謝系の生理反応を説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	運動と神経系(1) 神経系基礎			
2	運動と神経系(2)			
3	運動と筋活動(1) 運動と骨格筋・筋収縮のメカニズム			
4	運動と筋活動(2) 運動単位・筋収縮の種類と張力曲線			
5	運動と筋活動(3) 運動とエネルギー代謝			
6	運動と神経系、筋活動 解説			
7	運動と呼吸系(1) 呼吸系基礎			
8	運動と呼吸系(2) 運動と呼吸応答			
9	運動と循環系(1) 循環系基礎			
10	運動と循環系(2) 運動と循環反応			
11	運動と循環系(3) 運動と循環反応			
12	運動と代謝 基礎			
13	運動と代謝 体温調節			
14	運動と循環系、呼吸系、代謝系 解説			
15	運動における生理反応 まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	90%			
レポート・課題	10%	課題の実施、提出状況（提出期限・方法）を評価する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名		出版社名
なし				
自由記載	講義資料を配布する。			
参考文献				
書名		著者・編集者名		出版社名
自由記載	解剖学ⅠⅡ、生理学ⅠⅡの教科書や講義資料にて復習しながら受講してください。			
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
運動生理学演習		演習・講義	田中 靖人・小林 正明・喜田 直樹	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
理学療法において重要な人体の機能について演習を学ぶことで、呼吸・循環等の反応および筋収縮、姿勢制御機構等の反応を演習を通して理解できるようになることを目的とする。 また、演習方法、結果の処理、考察の仕方について習熟し、レポートを作成ができるようになることを目的とする。				
授業の到達目標				
様々な生理的刺激に対し、ヒトがどのような反応を示すのかを演習によって明らかにし、その結果に対して、エビデンスに基づいた自分の考えをレポートとしてまとめることを目標とする。				
授業計画				
回	内容			
1	演習オリエンテーション 1			
2	演習オリエンテーション 2			
3	演習 1 筋刺激時に起こる生体信号の抽出 1（田中）			
4	演習 1 筋刺激時に起こる生体信号の抽出 2（田中）			
5	レポート作成のためのデータ処理・文献講読 1			
6	演習 1 まとめ（田中）			
7	演習 2 有酸素運動時の循環器系の反応 1（小林）			
8	演習 2 有酸素運動時の循環器系の反応 2（小林）			
9	レポート作成のためのデータ処理・文献講読 2			
10	演習 2 まとめ（小林）			
11	演習 3 立位における重心動揺の理解 1（喜田）			
12	演習 3 立位における重心動揺の理解 2（喜田）			
13	レポート作成のためのデータ処理・文献講読 3			
14	演習 3 まとめ（喜田）			
15	まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	100%	3分野のレポート得点を合算して評価する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載	レポート作成のために必要な文献については、担当教員から指示することがある。			
備考				
演習 1 から 3 をグループでローテーションしていく。 演習データが収集できないと、レポートが書けなくなることがあるので、欠席しないこと。				

科目名		授業形態	担当教員名	
運動学Ⅰ		講義	前川 加奈	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
運動学は身体構造や運動力学などを包括した学問であり、理学療法の基礎となる。その理解のためには、物理学の意味での運動学と、骨・関節の運動学が必要となる。運動学Ⅰでは運動学Ⅱ・Ⅲでの学修も視野に入れて、力学的な分野における運動学を理解すること、また、体幹の骨運動学、関節運動学など、生体での運動学を理解すること、そして姿勢と姿勢制御について理解することを目的とする。				
授業の到達目標				
・身体運動の記述と解釈に必要な力学の基礎知識を理解する。生体力学における運動学の基礎を説明できる。 ・体幹の各関節の構造・関節運動を理解し、そのメカニズムについて説明できる。 ・姿勢と姿勢制御の定義を理解し、基本的立位姿勢の理想的アライメントや立位姿勢保持に活動する筋、姿勢制御の神経学的機序の概要を説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	運動学の概要、運動の面と軸、関節運動と関節包内運動			
2	骨格筋の機能			
3	生体力学の基礎①（力の合成・分解）			
4	生体力学の基礎②（身体の中でのてこ①）			
5	生体力学の基礎③（身体の中でのてこ②）			
6	生体力学の基礎④（滑車、運動の法則）			
7	体幹の運動学総論、脊柱の関節構造と運動			
8	頸椎の基礎			
9	頸椎の運動			
10	胸部の基礎・運動			
11	胸腰部の基礎			
12	胸腰部の運動			
13	姿勢の基礎			
14	姿勢の観察			
15	姿勢の制御			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%			
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
基礎運動学 第7版		中村隆一 他	医歯薬出版会社	
筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版		Donald A. neumann 他	医歯薬出版会社	
プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論/運動器系 第4版		坂井建雄・松村譲児 監訳	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
身体運動の理解につなげる物理学		江原義弘 他	南江堂	
15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学		石川朗 他	中山書店	
自由記載				
備考				
・4名程度でグループをつくり、骨標本などをグループで確認しながら、講義を行います。 ・プリント配布、骨標本や骨模型など準備物も多いためクラスで協力して準備に臨んでください。				

科目名		授業形態	担当教員名	
運動学Ⅱ		講義	谷 和真	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
運動学は身体構造や運動力学などを包括した学問であり、理学療法の基礎となる。その理解の為には、物理学の意味での運動学と、骨・関節の運動学が必要になる。運動学Ⅱでは、解剖学で学修する骨・関節・筋学および運動学Ⅰで学修する生体力学の基礎を基に、上肢の骨運動学、関節運動学などを学修し生体での運動学を理解する。				
授業の到達目標				
・上肢の各関節の構造・関節運動を理解する。 ・上肢の各関節の運動と靱帯および筋の作用との関係性を理解する。 ・上肢の運動学と運動力学の基礎を理解し、身体の動きについて理解する。				
授業計画				
回	内容			
1	上肢運動学 総論			
2	肩複合体① 胸鎖関節			
3	肩複合体② 肩甲胸郭関節			
4	肩複合体③ 肩甲上腕関節			
5	肩複合体④ 肩甲上腕リズム			
6	肩複合体⑤ 肩複合体の筋			
7	肘関節・前腕複合体① 肘関節の骨			
8	肘関節・前腕複合体② 腕尺関節・腕橈関節			
9	肘関節・前腕複合体③ 前腕複合体の骨			
10	肘関節・前腕複合体④ 上橈尺関節・下橈尺関節			
11	手関節① 橈骨手根関節・手根中央関節			
12	手関節② 手根管			
13	手関節③ 橈骨手根関節・手根中央関節の関節包内運動			
14	手部① 指節間関節・中手指節関節			
15	手部② 手の変形 まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	80%			
レポート・課題				
小テスト	20%			
その他				
自由記載	授業の中で一度小テストを実施します。範囲は授業の中で説明します。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
基礎運動学 第7版		中村隆一 他	医歯薬出版株式会社	
筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版		Donald A. neumann 他	医歯薬出版株式会社	
プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論/運動器系 第4版		坂井建雄・松村譲児 監訳	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準整形外科学 第15版		井樋栄二・津村弘 他	医学書院	
PT・OTのための運動学テキスト 第1版補訂版 基礎・実習・臨床		小柳磨穀 他	金原出版株式会社	
15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学		石川朗 他	中山書店	
自由記載				
・準備物は骨標本、骨模型を使用し班となって受講します。プリント配布もあるため互いに協力し準備に臨むこと。 ・解剖学演習Ⅰ、Ⅱでの上肢分野の知識を使用して学びますので、各自、十分復習した上で受講すること。 ・状況によって進度など変更する場合があります。				

科目名		授業形態	担当教員名	
運動学Ⅲ		講義	小堀 博史	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
運動学は身体構造や運動力学などを包括した学問であり、その理解の為には、物理学の意味での運動学と、骨・関節の運動学が必要になる。運動学Ⅲでは、解剖学で学修する骨・関節・筋学および運動学Ⅰで学修する生体力学の基礎を基に、下肢分野の骨運動学、関節運動学など生体における運動学を学ぶ。また、併せて動作（歩行）との繋がりについても理解を深めていくことを目的とする。				
授業の到達目標				
下肢の関節構造とそれに関わる関節運動・力学の単語や用語の意味を理解できる。 下肢の動きと制御に関与する構造物の把握とそのメカニズムについて自らの身体を用いて説明できる。 歩行の概要ならびに構成要素を理解し、歩行に必要な運動と下肢関節の関節運動・筋活動との関連性を説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	下肢の運動学総論、骨盤帯・股関節の構造			
2	股関節の運動① 骨・関節の働き			
3	股関節の運動② 靱帯・血管の作用			
4	股関節の運動③ 筋の働き			
5	膝関節の構造① 骨・関節の働き			
6	膝関節の構造② 関節内運動について			
7	膝関節の運動① 靱帯の作用			
8	膝関節の運動② 筋の作用			
9	股と膝関節の運動 まとめ			
10	足関節の構造 骨・関節の働き			
11	足関節の運動① 足部アーチについて			
12	足関節の運動② 筋の作用			
13	膝と足関節の運動 まとめ			
14	歩行の構成要素と運動学① 歩行の基礎知識			
15	歩行の構成要素と運動学② 歩行周期について			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	80%			
レポート・課題				
小テスト	20%			
その他				
自由記載	授業の中で小テストを行います。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
基礎運動学 第7版		中村隆一 他	医歯薬出版株式会社	
筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版		Donald A. neumann 他	医歯薬出版株式会社	
プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論/運動器系 第4版		坂井建雄・松村譲児 監訳	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
PT・OTのための運動学テキスト 基礎・実習・臨床		小柳磨穀 他	金原出版株式会社	
15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学		石川朗 他	中山書店	
自由記載				
備考				
・プリント配布、骨標本や骨模型など準備物も多いため、クラスで協力して準備に臨んでください。 ・状況によって進度など変更する場合があります。				

科目名		授業形態	担当教員名	
内科学Ⅰ		講義	坂東 恵美子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間（ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
本講義では、内科の主要な疾患について理解することを目的とする。具体的には、器官別に正常の構造・機能に関する知識を再度整理するとともに、主要疾患の病因および病態についての基本的知識を学習する。				
授業の到達目標				
疾患の病因・病態について基本的知識を理解し説明できるようになる。				
授業計画				
回	内容			
1	総論：内科学について			
2	細胞・腫瘍（１）：人体の構成と細胞に関する組織と生理学を含めた正常と異常の差異について			
3	細胞・腫瘍（２）：人体の構成と細胞に関する組織と生理学を含めた正常と異常の差異について			
4	骨格・筋肉：骨格と筋肉に関する基本的な解剖学的・生理学的事項の確認と代表的な疾患について			
5	神経疾患（１）：神経細胞・組織に関する基本的な解剖学的・生理学的事項の確認			
6	神経疾患（２）感覚器疾患：代表的な神経疾患および感覚器の本的な解剖学的・生理学的事項の確認			
7	血液疾患（１）血液・体液に関する基本的事項			
8	血液疾患（２）血液系の代表的な疾患について			
9	免疫疾患（１）免疫に関する基本的事項			
10	免疫疾患（２）免疫反応による疾患について			
11	循環器系疾患（１）：心臓に関する基本的な解剖学的・生理学的事項の確認			
12	循環器系疾患（２）：心臓に関する代表的な疾患			
13	循環器系疾患（３）：血管に関する基本的な解剖学的・生理学的事項の確認			
14	循環器系疾患（４）：血管に関する代表的な疾患			
15	症候学、まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	70%	理学療法士国家試験の過去10年間の問題を参考にして出題する。なお、国試過去問については、講義内で配布する。		
レポート・課題				
小テスト	30%	3回実施する。各疾患に関連する解剖生理学の範囲から出題する。		
その他				
自由記載	国家試験過去問題については各自授業進度に合わせて学習すること。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
【副読本として】疾患とつながる解剖生理図鑑		グロー	永岡書店	
自由記載	適宜資料を配布する。			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なるほどなっとく！ 内科学 第3版		浅野嘉延	南山堂	
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学 第3版		前田真治・上月正博・飯山準一	医学書院	
自由記載				
備考				
国家試験に必要な解剖・生理学の知識の整理も多く含む講義です。自身の今後のために講義時間中の学習を望みます。				

科目名		授業形態	担当教員名	
小児科学		講義	西村 範行	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
15 時間 （ 1 単位）		8 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
小児の成長と発達や、主な小児疾患の病態や予後、また、小児を取り巻く種々の問題について解説する。				
授業の到達目標				
医療者であるとともに、親や社会人として、こどもの状態を適切に把握・対処したり、こども達をとりまく諸問題を正しく理解する事ができるようになる。				
授業計画				
回	内容			
1	小児の成長と発達			
2	小児の救急			
3	遺伝性疾患			
4	神経・筋疾患			
5	免疫・アレルギー疾患			
6	血液腫瘍性疾患			
7	固形腫瘍性疾患			
8	新生児			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	100%	講義毎に提出する。評価基準は別途示す。		
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
こどもの病態とケア ナースと専門職のために 改訂第7版		高田哲・白木和夫	へるす出版	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
病理学概論		講義	荒木 金隆	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 2 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
病理学とは病気の原因やその成り立ちを科学的に理解する学問です。本授業は病気の成り立ちを幾つかのカテゴリーに分類して講義を行います。人間の生理機能との関連において病気の本質を知り、病気を来す病因や病態について、また病気相互の関連についての概要を理解できるようになることを目的とします。				
授業の到達目標				
1. 様々な病気で共通する病理学的変化を理解することができる。 2. 代謝異常、循環障害、免疫、炎症、腫瘍について概要を理解することができる。				
授業計画				
回	内容			
1	病因論：内因 外因 及び内因の中で特に内分泌疾患の概要			
2	先天異常疾患：染色体 遺伝子の異常 環境要因			
3	先天異常疾患各論：神経系及び筋肉系			
4	傷害と適応及び修復：退行性病変及び進行性病変と組織の修復			
5	代謝異常(1)各論を含む 蛋白質 脂質 糖質代謝異常の概念と関連する疾患・老化			
6	代謝異常(2) カルシウム 銅 鉄 ビリルビンの代謝異常・内分泌異常			
7	循環障害(1) 充血 うっ血 虚血 出血 浮腫			
8	循環障害(2)各論を含む 血栓症 塞栓症 梗塞 虚血性疾患の概要			
9	循環障害(3) 高血圧 肺高血圧 側副循環(門脈圧亢進症) ショック			
10	免疫1：免疫の概念及びその成立について			
11	炎症：炎症の定義 炎症に関与する細胞 急性と慢性炎症の比較と病態			
12	免疫2：アレルギー性組織障害 自己免疫疾患(含む膠原病) 免疫不全 拒絶反応を含む			
13	感染症概要：病気の外因としての生物学的要因			
14	腫瘍総論：良性と悪性 発生母地と分化度			
15	腫瘍各論：各部位の腫瘍 特に脳腫瘍			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%			
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学・作業療法学：専門基礎分野 病理学 第5版		梶原博毅	医学書院	
自由記載	講義資料を配付する。授業はPCを持参するのでプロジェクターとHDMI接続コードを用意してください。			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
カラーアトラス 人体 解剖と機能		横地千仞	医学書院	
クエスチョン・バンクOT/PT国試解説2025共通問題		医療情報科学研究所	メディックスメディア	
PT・OT 基礎から学ぶ病理学ノート		中島雅美	医歯薬出版	
自由記載				
備考				
基礎医学と臨床との繋がりを修得している学年ではないが、将来のため長い時間をかけての知識習得を意識して学習されることを希望する。				

科目名		授業形態	担当教員名	
公衆衛生学		講義	小野 一男・井村 聡子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間（2 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
公衆衛生学の目的は、全ての人を対象とした健康の保持、増進、寿命の延伸、疾病の予防である。本科目では、環境汚染や社会・疾病構造の変化および医療の現状と課題を解説し、健康と生活の質(QOL)およびプライマリーヘルスケア(PHC)やヘルスプロモーション(HP)の概念を学ぶとともに、地域社会住民や施設集団におけるセルフケアの重要性と医療従事者の果たす役割を考察する。また世界観に基づく比較論的アプローチで国際医療すなわちGlobal Healthを学ぶ。一方、生活環境の進展に伴う肥満や生活習慣病など健康に関わる課題について、科学的な分析と解析を行い、社会集団における健康を科学的に理解し、疾病予防を図る。				
授業の到達目標				
現在の公衆衛生の問題について理解し、自身の意見を述べるができるようになる。				
授業計画				
回	内容			
1	公衆衛生学の概念			
2	公衆衛生学の歴史・健康の概念			
3	人口統計・保健統計			
4	社会保障			
5	地域保健			
6	環境保健			
7	母子保健			
8	疫学			
9	成人保健			
10	高齢者保健・学校保健			
11	感染症・食品衛生			
12	環境保健			
13	精神保健			
14	産業保健			
15	国際保健			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	70%	定期試験（持ち込み不可筆記試験）		
レポート・課題	30%	レポート課題提出		
小テスト				
その他				
自由記載	評価基準について以下に示す。 成績は定期試験70点とレポート課題30点満点で評価する。 定期試験は筆記試験で得られた得点で評価する。 レポート課題は①レポート課題の規程や記述項目が指示どおり記載されているかどうか、②レポート課題のテーマの独創性、③提出期限を遵守しているかどうかなどで評価する。 レポート課題提出は必修とし、提出しなかった者に関しては定期試験の受験資格を与えない。 再試験は筆記試験100%とし、得られた得点で評価する。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
よくわかる専門基礎講座 公衆衛生 第17版		松木秀明 編	金原出版	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載				
備考				
公衆衛生学の講義期間中はテレビのニュースや新聞を精読し、現代社会の現状と保健医療の動向を把握し、公衆衛生の問題を日頃から考えるように心がけてください。				

科目名		授業形態	担当教員名	
社会福祉学		講義	棚野 恭範	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
福祉・医療・保健の連携の重要性の中で、「ノーマライゼーション・リハビリテーション」理念を基礎に、知識としての「社会福祉学」を単に制度・サービスの紹介・説明にとどまらず、事例を採り入れ、できるだけ身近なものとする。 社会福祉関連法規、制度について理解を深め、援助者としての援助観・援助方法も併せて学習することを目的とする。				
授業の到達目標				
1. 社会福祉制度の歴史と考え方を説明できる。 2. 社会福祉制度の体系と意義を説明できる。 3. 障がい者の自立を支える制度の内容を説明できる。 4. 介護保険制度について説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	総論Ⅰ 社会福祉学を学ぶ意味、社会福祉の歩み			
2	総論Ⅱ 社会福祉関連法と施設・機関・福祉専門職・キーワード			
3	地域福祉Ⅰ 地域をとりまく課題、地域福祉とは			
4	地域福祉Ⅱ ボランティア活動、阪神淡路大震災と災害ボランティア			
5	グループワークⅠ 社会福祉を考える			
6	社会保障制度Ⅰ 社会保障制度の現状と課題、生活困窮			
7	社会保障制度Ⅱ 生活保護制度、課題解決と法律・制度			
8	子ども家庭福祉Ⅰ 子ども家庭福祉、課題解決と法律・制度・社会資源			
9	子ども家庭福祉Ⅱ 子どもをとりまく現状と課題、ヤングケアラーとは			
10	障がい者福祉Ⅰ 障がい者福祉、課題解決と法律・制度・社会資源			
11	障がい者福祉Ⅱ 障がい者をとりまく現状と課題			
12	高齢者福祉Ⅰ 高齢社会の現状と課題			
13	高齢者福祉Ⅱ 要援護高齢者と介護問題、地域包括ケアシステム、介護保険制度			
14	グループワークⅡ 福祉課題の検討			
15	社会福祉学まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	100%	社会福祉全般にわたる理解内容を評価基準とする		
レポート・課題				
小テスト				
その他				
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
よくわかる社会福祉 新版		山縣文治・岡田忠克 編	ミネルヴァ書房	
自由記載	レジメ・講義（参考）資料を配付する			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
特に指定しない				
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
基礎理学療法学演習Ⅰ		演習	坂東 恵美子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間（1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
1. 理学療法評価過程の情報収集と医療面接において種々の問診方法を修得する 2. IPE（多職種連携教育）を通して、多職種の存在と役割を知る。また、協働して課題に取り組むことを通して他者理解の基礎を養う。				
授業の到達目標				
1. 情報収集の目的・重要性を理解する。2. 種々の問診方法について説明できる。 3. 対象者に応じた問診を適切に実施できる。4. 初歩的なコミュニケーションスキルを身に付け、実施できる。 5. 他者と協力し、課題解決をすることができる。				
授業計画				
回	内容			
1	IPE①			
2	IPE②			
3	IPE③			
4	IPE④			
5	IPE⑤			
6	IPE⑥			
7	IPE⑦			
8	IPE⑧			
9	情報収集① 評価の概念と情報収集			
10	情報収集② 情報の種類と分類			
11	情報収集③ 情報収集 演習			
12	コミュニケーション技法 演習			
13	医療面接 演習			
14	医療面接 演習 実技試験			
15	見学体験実習前演習、まとめ			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	80%	課題・発表など(40%IPE、40%IPE以外) 評価基準は別途示す		
小テスト				
その他	20%	医療面接演習実技試験		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学 第4版		内山靖 他編	医学書院	
自由記載				
備考				
IPEとそれ以外の講義は別スケジュールで進行するため、授業回の内容の順番は前後する。				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法管理学Ⅰ		講義	坂東 恵美子	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
15 時間（1 単位）		8 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
理学療法士に求められる役割・知識を踏まえて、良質な理学療法提供のために、自己管理も含めて理学療法場面におけるリスク管理やマネジメント、さらには理学療法士を取り巻く社会保障制度について知る。また、理学療法士養成カリキュラムにおける臨床実習の形態とその目標・用語について知り、臨床にむけた自己管理の必要性を認識する。				
授業の到達目標				
理学療法士に求められる管理・マネジメントについて理解できる。理学療法士の自己管理、情報の管理、医療事故（アクシデント、インシデント）への対応、感染対策について説明できる。社会保障制度（主に医療保険制度、介護保険制度）について説明できる。理学療法士養成カリキュラムの臨床実習について、その形態・目標・用語を説明できる。				
授業計画				
回	内容			
1	理学療法士と管理・マネジメント 理学療法士と自己管理1（PDCAサイクル、カリキュラムツリーを通して自分の学習を考える、論理的思考力、ハラスメントについて）			
2	理学療法士と自己管理2（プレゼンテーション力の必要性について、コミュニケーションスキル・信頼感の必要性について）			
3	リスクマネジメントと理学療法1（院内感染と感染対策、医療現場における清潔・不潔）			
4	リスクマネジメントと理学療法2（標準予防策、手指衛生・手洗い実習）			
5	リスクマネジメントと理学療法3（リスク管理とは、医療事故（アクシデント・インシデント）・その報告と安全への取り組み）			
6	理学療法士と情報の管理（理学療法士と記録、診療録について、個人情報保護法）			
7	理学療法士を取り巻く社会保障と保険制度（社会の一員となるために知っておきたいこと、電子メールのマナー）			
8	理学療法士養成カリキュラムにおける臨床実習について			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	60%	講義内容より選択されたテーマについてまとめ、課題を提出する。評価基準は別途示す。		
小テスト	40%	毎回講義内容の課題を提出する。2回目の講義より、前回の講義の小テストを実施する。		
その他				
自由記載	成績の基準を満たさなかった場合の再課題の実施は開講学期のみとする。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
理学療法管理学 第2版		橋本隆（編著者代表）	医歯薬出版株式会社	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
15レクチャーシリーズ理学療法テキスト 理学療法管理学		長野聖	中山書店	
PT・OT・STのためのコミュニケーション実践ガイド 第3版		山口美和	医学書院	
自由記載				
備考				
講義の順番は前後することがある				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法評価学Ⅰ		演習・講義	谷 和真	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
理学療法を行うための検査・測定について学び、実技を通して技術の修得をすることが目的となる。解剖学、運動学の知識を基に骨指標の触診、形態測定、関節可動域測定の方法を正しく実施できるように身に付ける。				
授業の到達目標				
1. 骨指標を理解し、触診の実施ができる。 2. 形態測定法を理解し、実施できる。 3. 関節可動域測定を理解し、実施できる。 4. 一定の時間内に評価を終了し、記録し、まとめることができる。				
授業計画				
回	内容			
1	骨指標の理解と触診			
2	形態測定：四肢長① 上肢の四肢長			
3	形態測定：四肢長② 下肢の四肢長			
4	形態測定：周径① 上肢の四肢周径			
5	形態測定：周径② 下肢の四肢周径 まとめ			
6	実技テスト① 形態測定			
7	関節可動域測定：上肢測定① 肩関節の関節可動域測定			
8	関節可動域測定：上肢測定② 肘関節の関節可動域測定			
9	関節可動域測定：上肢測定③ 手関節・手指の関節可動域測定			
10	関節可動域測定：下肢測定① 股関節の関節可動域測定			
11	関節可動域測定：下肢測定② 膝関節の関節可動域測定			
12	関節可動域測定：下肢測定③ 足関節・足趾の関節可動域測定			
13	関節可動域測定：体幹測定① 肩甲骨・頸部の関節可動域測定			
14	関節可動域測定：体幹測定② 胸腰部の関節可動域測定 まとめ			
15	実技テスト② 関節可動域測定			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	40%			
レポート・課題				
小テスト				
その他	60%	実技試験		
自由記載	筆記試験、実技テストの割合は上記の通りとし60%以上で合格とする。 再試験に関しては実技試験100%で評価とする。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学 第4版		内山靖 編	医学書院	
運動療法のための機能解剖学的触診技術 動画プラス 上肢 改訂第2版		林典雄 著	メジカルビュー社	
運動療法のための機能解剖学的触診技術 動画プラス 下肢・体幹 改訂第2版		林典雄 著	メジカルビュー社	
自由記載	プロメテウス解剖学アトラス解剖学総論/運動器系第4版を各自、必要に応じて使用し理解を深めること。			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
理学療法評価学 第6版補訂版		松澤正 他	金原出版株式会社	
臨床理学療法評価法 臨床で即役に立つ理学療法評価法のすべて 第2版		鈴木俊明 監修	アイペック	
自由記載				
備考				
Tシャツ・ハーフパンツなど動きやすい服装で授業に参加すること。小テストは授業内に実施する。授業の進行により、予定された講義・演習内容を変更することがある。 授業時間外を有効に活用し練習を行って技術を習得すること。				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法評価学Ⅱ		演習・講義	福林 秀幸	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
理学療法士にとって必要な検査項目の中に徒手筋力テスト（MMT）がある。前期に学んだ筋・骨格系の知識を基に筋力の状態を評価する技術と筋力低下をしている関連要因を疾患の画像も含めて説明し、適切に評価できる検査技術の習得を目指す。また、徒手のみではなく測定機器を使用した筋力測定方法も紹介する。1年次後期のカリキュラムへ組み込むことで、実技を充実させることにより早期技術習得、実技練習時間の確保を図る。				
授業の到達目標				
基本的な徒手筋力検査法や検査を実施するに当たっての注意事項を学び、検査対象者の筋力を測ることに いて、正しい検査結果を導き出すことが出来るようになる。 検査結果から、筋力低下の要因を考えることができるようになる。				
授業計画				
回	内容			
1	MMTの概要 理論			
2	筋力検査の目的 筋の触診の方法			
3	上肢① 肩関節 （腱板損傷US画像）			
4	上肢② 肩関節 肩甲帯			
5	上肢③ 肩甲帯 肘関節			
6	上肢④ 手関節 手指			
7	下肢① 股関節 （股関節周囲筋US画像）			
8	下肢② 股関節 膝関節 （膝周囲筋US画像）			
9	下肢③ 足関節 （下腿周囲筋US画像）			
10	下肢④ 足関節 足趾 （足底腱膜炎 アキレス腱炎 カルシウム沈着 画像）			
11	体幹① 頭頸部			
12	体幹② 胸腰椎 （筋・筋膜性腰痛）			
13	顔面 ハンドヘルドダイナモメーター			
14	筋力検査結果の表し方と意味 粗大筋力 握力			
15	実技テスト			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	40%			
レポート・課題				
小テスト				
その他	60%	実技試験		
自由記載	再試験に関しては、実技試験のみ。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学 第4版		内山靖 編	医学書院	
新・徒手筋力検査法 原著第10版		Helen J. Hislop 他著	協同医書出版社	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法評価学Ⅲ		演習・講義	小林 正明	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
理学療法を行うにあたり日々の病態変化を把握する事は重要である。 本科目では理学療法評価の意義、主に呼吸・循環器系のフィジカルアセスメント・測定技法について学修する。 各種検査データの解釈や酸塩基平衡について学修する。				
授業の到達目標				
1．バイタルサイン(呼吸、脈拍、呼吸数など)が確認できる。 2．医療面接のポイントを理解でき、説明できる。 3．呼吸循環器系疾患に対する基本的な評価方法について説明、実施することができる。 4．血液データや呼吸機能検査の結果を解釈できる。				
授業計画				
回	内容			
1	オリエンテーション、評価の意義			
2	問診、バイタルチェックの意義、運動中止基準			
3	体温・脈拍測定			
4	血圧測定の実技①			
5	血圧測定の実技②			
6	血圧測定の実技テスト			
7	循環器疾患の概要とフィジカルアセスメント			
8	心臓の解剖学的位置・心音聴診・心電図の基礎			
9	心電図の基礎・運動耐容能・運動負荷試験			
10	呼吸器疾患の概要とフィジカルアセスメント			
11	体表と肺の位置関係について			
12	呼吸数の計測・打診の実施			
13	打診・聴診(呼吸器系)の実施			
14	呼吸機能検査(スパイログラム、フローボリューム曲線について)の見方			
15	血液ガスデータ、酸塩基平衡の見方			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験	70%			
レポート・課題				
小テスト				
その他	30%	実技試験(血圧測定)		
自由記載	再試験に関しては筆記試験100%で評価する。			
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
標準理学療法学 専門分野 理学療法評価学 第4版		内山靖 編	医学書院	
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
リハビリテーション運動生理学		玉木彰・解良武士	メジカルビュー社	
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
臨床実習Ⅰ		実習	坂東 恵美子・福林 秀幸・前川 加奈 小林 正明・谷 和真・小堀 博史	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
45 時間（1 単位）		回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
1. リハビリテーションに関わる病院や施設を見学し、理学療法士としての役割や仕事を理解する。 2. 施設の利用者様や障害のある方と接し、よりよい人間関係の構築を図る。				
授業の到達目標				
1. リハビリテーションに関わる施設を見学し、理学療法士の仕事・役割を理解する。 2. 多職種との連携について説明することができる。 3. 実習生として清潔で適切な身だしなみ、言葉遣い、礼儀正しい態度をとることができる。 4. 理学療法の対象となる患者さま、利用者さまと共感的態度で接し、良い人間関係を構築することができる。 5. 理学療法士になるためにどのような勉強が必要かを考え、今後の勉学への意欲を高める。				
授業計画				
回	内容			
	オリエンテーション			
	急性期病院見学実習			
	回復期病院見学実習			
	介護老人保健施設見学実習			
	有料老人ホーム見学実習			
	身障・知的障害、就労支援施設見学実習			
	療育センター見学実習			
	家庭介護リハビリ研修センター（兵庫県立リハビリテーションセンター内）見学実習			
	施設見学体験実習			
	振り返り			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題				
小テスト				
その他	100%	実習内容、各実習での課題への取り組み・提出等 総合的に評価する。評価基準は別途示す。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名		出版社名
なし				
自由記載				
参考文献				
書名		著者・編集者名		出版社名
自由記載				
備考				

科目名		授業形態	担当教員名	
理学療法特論Ⅱ		演習	谷 和真・前川 加奈	
時間数（単位数）		授業回数	年次	開講時期
30 時間 （ 1 単位）		15 回	1 年次	後期
授業の目的・概要				
学生生活において理学療法士としての基本的資質の向上を目指す。 他者と交流を図り課題解決能力やコミュニケーション能力を高める。 学習・演習を通して知識の再認識をする。 学生生活を円滑に行うための連絡事項を伝える。				
授業の到達目標				
1. 基礎的な接遇・マナーを理解し、実践できる。 2. 他者と協力し課題解決をすることができる。 3. 勉強の方法を学び、日々の学習・演習に活かすことができる。				
授業計画				
回	内容			
1	学生生活オリエンテーション			
2	施設見学実習後グループディスカッション			
3	施設見学実習 グループ発表レジュメ作成			
4	施設見学実習 グループ発表			
5	施設見学生験実習オリエンテーション(東部療育センター)			
6	施設見学生験実習オリエンテーション(聖隷福祉事業団)			
7	科目別学習① 骨			
8	科目別学習② 筋			
9	科目別学習③ 検査測定			
10	人体解剖学実習 オリエンテーション			
11	人体解剖学実習 見学			
12	施設見学生験実習オリエンテーション① 個人資料作成			
13	施設見学生験実習オリエンテーション② 実習手引き説明			
14	施設見学生験実習オリエンテーション③ 実習課題説明			
15	施設見学生験実習オリエンテーション④ 1年生後期の振り返りと2学年に向けて			
成績の評価方法と基準				
種別	割合	評価基準・その他備考		
定期試験				
レポート・課題	60%	課題への取り組みや結果をもとに評価する。評価基準は別途示す。		
小テスト	30%	小テストを複数回実施する。		
その他	10%	事後課題、実習ファイルの提出。評価基準は別途示す。		
自由記載				
教科書				
書名		著者・編集者名	出版社名	
なし				
自由記載	適宜資料を配布する			
参考文献				
書名		著者・編集者名	出版社名	
自由記載				
備考				
実習の日程調整等により内容が前後する場合があります。				